

# 中国に於ける北魏法難の研究について

春本秀雄

## 一叙

北魏の法難は都合三回あった。(1)太延四年(四三八)……太武帝が五十歳以下の沙門の選俗を命じた。(『魏書』卷四上、世祖紀第四上・『資治通鑑』卷一百二十三、宋紀五、文帝元嘉十五年(四三八)、(2)太平真君五年(四四四)……太武帝が沙門・師巫(巫覡)の妖怪の言を禁じ、更に沙門・師巫(巫覡)の私養を禁じた。(『魏書』卷四下、世祖紀第四下・『資治通鑑』卷一百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十一年(四四四)、(3)太平真君七年(四四六)……太武帝が堂塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡絳をみな撃破焚焼すべきこと、及び沙門は少長となく悉く生き埋めにすべきことを命じた。(『魏書』卷百十四、積老志、太平真君七年三月・『資治通鑑』卷一百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十三年(四四六)・『高僧伝』卷十曇始伝(大正五十・三九二中)の三回である。この廢仏についての拙論に「北魏の凶讖禁絶―特に太武帝時について―」(『大正大学研究紀要』第九十二輯二〇〇七年(平成十九年)三月)がある。ここに於いて、北魏法難の原因、理由についての従来の定説とは異なる、新説である春本説の提示をしてその比較検討をした。更に、春本説と従来の定説、諸説との相違を詳細に明確にして、その妥当性を論じ、春本説を定説化する段階があると考え、これについての拙論に「北魏法難の実態解明について」(『大正大学研究紀要』第九十四輯二〇〇九年(平成二十一年)三月)がある。ここに於いて、論者がこれまでに未聞未見だった諸研究文献資料をもとに、新説である春本説<sup>1)</sup>を明確にしてその説の妥当性を論じた。

しかし、この拙論に於いて、近年の中国に於ける北魏法難の研究論文である(①向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」(『北京师范大学学报(社会科学版)』一九九四年第二期) ②栾贵川「北魏太武帝灭佛原因新论」(『中国史研究』一九九七年第二期) ③孙晓莹「浅析北魏太武帝灭佛原因」(『当代宗教学研究』二〇〇〇年第三期) ④张箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」(『西南民族大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇〇年第十二期) ⑤李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」(『通化师范学院学报』二〇〇一年第二十二卷第三期) ⑥劉淑芬「從民族史的角度看太武滅佛」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二十二卷第三期))

言研究所集刊》二〇〇一年三月) ⑦李玉芳「北魏太武帝灭佛原因浅析」(《宜宾学院学报》二〇〇四年第四卷第一期) ⑧王勇「太武帝大规模“灭法”原因初探」(《燕北师范学院学报》二〇〇四年第四期) ⑨陈燕「北魏太武帝崇道抑佛的回顾与反思」(《云南民族大学学报(哲学社会科学版)》二〇〇五年第四期) ⑩王勇「北魏前期佛教文化初探」(《晋中学院学报》二〇〇五年第二期) ⑪肖黎「论北朝的两次灭佛斗争」(《河北学刊》一九九二年第一期) ⑫施光明「北朝的寺院经济和反佛浪潮」(《浙江学刊》一九九三年第一期) ⑬吴平「北朝的兴佛与灭佛」(《华夏文化》二〇〇〇年第三期) ⑭韩毅「对“三武灭佛”与佛教寺院地主所有制经济发展道路问题的几点思考」(《天水师范学院学报》二〇〇〇年第二期) ⑮张箭「三武一宗灭佛研究」(四川大学博士论文 二〇〇一年) ⑯理净「三武一宗 法难引起的反思」(《五台山研究》二〇〇四年第三期) ⑰袁文良「中国历史上的“三武灭佛”事件」(《文史天地》二〇〇七年第八期) についての概ねの分類はしたものの、未だに詳細な論考はしていないのが現状である。<sup>2)</sup>

従って、ここに未だに着手していない近年の中国に於ける北魏法難の研究についての詳細な論考をして、従来の拙論に於ける中国の北魏法難の研究と併せて総括を行い、これ等の中国の諸説と新説である春本説との比較検討を行い、その説の妥当性について論じてみたい。

## 二 これまでの経緯

論者には「北魏法難の研究」についての多くの論考がある。<sup>3)</sup> これ等の拙論の立説形成に用いた日本、中国の諸研究論文等は次の如くである。  
(日本)

- ①久保田量遠著『支那儒道仏三教史論』(東方書院 一九三二年(昭和六年))
- ②塚本善隆「北魏太武帝の廢仏毀釈」(『支那仏教史学』一一四 一九三七年(昭和十二年))
- ③塚本善隆「中国の仏教迫害(三武一宗の廢仏)」(『講座仏教Ⅳ中国仏教』大蔵出版株式会社 一九五八年(昭和三十三年))
- ④横超慧日「北魏仏教の基本的課題(横超慧日編『北魏仏教の研究』平楽寺書店 一九七〇年(昭和四十五年))
- ⑤安居香山「漢魏六朝時代における図讖と仏教——特に僧伝を中心として——」(安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年(昭和五十一年))
- ⑥佐藤智水「北魏廢仏論序説」(『岡山大学法文学部学術紀要史学篇』三十九 一九七九年(昭和五十四年))
- ⑦鎌田茂雄著『中国仏教史』第三卷(東京大学出版会 一九八四年(昭和五十九年)) 第四章 北魏の仏教 第二節 北魏の仏教
- ⑧松丸道雄他編『世界歴史体系 中国史 三国～唐 2』(山川出版社 一九九六年(平成八年)) 第三章 南北朝 2 北朝の政治(窪添慶文)

⑨串田久治著『中国古代の「謠」と「予言」』（創文社 一九九九年（平成十一年））

⑩野上俊静・小川貫弑・牧田諦亮・野村耀昌・佐藤達玄著『仏教史概説 中国篇』（平楽寺書店 一九六六年（昭和四十三年））第四章南北朝の仏教―  
教団の発展と儒道二教―9 北魏太武帝の廃仏

⑪平川彰著『インド 中国 日本 仏教通史』（春秋社 一九七七年（昭和五十二年））五月 第三章中国仏教 二 羅什及び南北朝の仏教 国家と仏教

⑫藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間にて』（白帝社 二〇〇四年（平成十五年））十月一日白帝社アジア史選書〇〇五

（中国）

⑬杜士銓主編『北魏史』（山西高校聯合出版社 一九九二年（平成四年））（楊国勇）

⑭任継愈主編『定本 中国仏教史Ⅲ』（柏書房 一九九四年（平成六年））

⑮鄭利安編著『魏晋南北朝史研究論文書目引得』（台湾中華書局印行、中華民國七四年九月、一九八五年（昭和六十年））

⑯呂宗力（訳 李雲・中村敏子）『両晋南北朝より隋に至る図識を禁絶する歴史の真相』（『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書院 一九九六年（平成八年））

以上の諸研究論文等をもとにこれまでに論考を重ねて来た。

しかし、先に「北魏法難の実態解明について」（『大正大学研究紀要』第九十四輯二〇〇九年（平成二十一年）三月）の註③に次のように述べた。

平成二十年四月二十五日（金）六時限目の論者担当の「東洋文献講読B・1」の講義の時に北京大学からの留学生の孟慶楠（大正大学文学部歴史文化学科 短期（平成十九年四月から平成二十年八月）留学生 0709011…北京大学哲学研究科中国哲学修士課程二年）に、北魏の廃仏についての近年の中国の論文があれば紹介して欲しい旨告げた。孟慶楠は平成二十年五月九日（金）に北京大学図書館で論文検索したペーパーを持って来た。その論文名の一部を、本論考「四 春本説と中国の説（二）中国の説」に掲げた。ここに掲げた論文名のほとんどの論文を孟慶楠は論者に提供した。<sup>4</sup>ここに感謝する。次号の（平成二十二年三月『大正大学研究紀要』第九十五輯）に於いて、「仮題）中国に於ける北魏法難の研究」と題して孟慶楠の提示した論文について詳考する予定である。本論考の提出当初の原稿には既に孟慶楠が提示提供した論者にとつて平成二十年四月以前に未聞未見であった近年の中国の論文についての論考原稿が（一部分）存在していたのではあるが、本論考所載の規定による紙幅の制限により、割愛せざるをえなかった。次号掲載予定とならざるをえなかった事をここに記しておく。<sup>5</sup>

以上のように今回は、孟慶楠の紹介した資料についての詳細な論考を本拙論に於いて試み、論者の新説との比較検討をしてその諸説の妥当性を論じ、

「中国に於ける北魏法難の研究について」の総括を試みたいと考えている。

### 三 孟慶楠の紹介した資料について

北京大学からの大正大学留学生である孟慶楠が紹介した、論者にとって平成二十年四月以前には未聞未見であった、北魏法難についての近年の中国の論文は本論考「一叙」に於いて既に取り上げた①から⑩の論文である。これ等の論文の主張、説を要約して、適宜コメントを付け加えたと次の如くである。

#### ①向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」(《北京师范大学学报(社会科学版)》一九九四年第二期)

従来の北魏太武帝の廃仏の原因を「一は佛道之争説」・「二は经济原因説」としている。しかし、これ等の従来の両説を「笔者认为两种观点都有关不妥之处、都忽略了灭佛前北魏的政治史实与灭佛事件的联系、没有注意到太武时期两次灭佛的不同原因。」として、妥当でないとしている。つまり、廃仏の前の北魏の政治史実と廃仏事件の關係を見落としていて、更に、太武帝の時の二回の廃仏の同一ではない原因を見落としているのである。そして、「从前面的考证可以得知、太武时期共有两次灭佛。引起两次灭佛的原因不同。(以上の考証により知り得ることは、太武帝の時期に二回の廃仏があった。引き起こされた二回の廃仏の原因は同一ではない。)第一次是在太平真君五年(四四四年)。这次灭佛的特点是巫、道、佛均禁灭。其原因是其涉入刘洁、拓跋不等人反太武政变。这次政变是拓跋魏的社会变革在其统治阶级内部的反映。(第一回目は太平真君五年(四四四年)である。この廃仏の特徴は「巫、道、佛」が等しく禁廃されたことである。その原因は刘洁、拓跋不等人々の太武帝に反する政変とかわっている。この政変は拓跋魏の社会变革がその階級を統治しようとする内部の反映である。)第二次是一次激烈的灭佛运动、发生在太平真君七年(四四六年)。这次灭佛是在北魏境内民族矛盾十分尖锐并威胁到北魏统治的情况下发生的。原因是长安地区的僧侣卷入盖吴领导的反魏起义。(第二回目は一つの激的な廃仏運動であり、太平真君七年(四四六年)に発生した。この廃仏は北魏内の民族矛盾が十分に尖鋭化したものであり、それに北魏の統治を脅かす状況の下に発生したものである。原因は長安地区の僧侶の蓋吳の指導に巻き込まれた魏に反する武装蜂起である。)灭佛实质是镇压民族起义的副产品。太武时期的两次灭佛的时间如此之近、且刘洁、拓跋不等人反太武政变的史实分散在魏书各传中、不易察觉、至使人们将两次灭佛混而为一。(廃仏の实质は民族起義を鎮圧する副産品である。太武帝の時期の二回の廃仏の時期は接近しており、且つ、刘洁、拓跋不等人々の政変の史実は『魏書』の各伝の中に分散されており発見しにくく、人々に二回の廃仏を混一させ(本来別々のものを同一のものとさせ)た。)。……このように北魏太武帝の二回の廃仏はそれぞれ異なる理由により行われたとしながらも、二回の廃仏の实质は民族起義を鎮圧する副産品であるとしている。しか

し、向燕南の論述にはその民族起義と廢仏が何故結びつくのかの明確な説明がない。太武帝が民族起義を鎮圧するのに、何故廢仏を行ったのか、そのところの論理が明瞭でない。春本説では、太武帝は『宋書』索虜伝の「先是虜中謠言、「滅虜者呉也。」熹甚惡之。二十三年、北地瀘水蓋呉、年二十九、於杏城天台拳兵反虜、諸戎夷普並響應、有衆十余万。熹聞呉反惡其名、累遣軍擊之輒敗。」の「謠言」を封じる為に廢仏を行ったのであるとした。つまり、武功第一の太武帝にとっては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。つまり、「謠言—凶讖—僧侶—仏教」の密接な連関のもとに、凶讖禁絶と連携して廢仏は行われたとしたのであるとした。……（一）蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政権を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。」

### ② 梁貴川「北魏太武帝灭佛原因新论」（《中国史研究》一九九七年第二期）

この論文に次の如くある。「有人认为、盖吴起兵非同寻常、既早有灭魏者盖讖言的风行、又有十余万众摇旗呐喊、声势不小。若使盖吴在关中站稳脚跟、就有可能出现他给南朝宋文帝求援表中所说的、对北魏大可「覆其巢窟」、使中都有鸣鸾之响、荒余怀来苏之德」。好像北魏政权的生死存亡完全系于这关中一役了。那么、大有与盖吴通谋之嫌的长安寺僧及其同类全国沙门也就在劫难逃了。（盖吴的起兵は尋常ではなく、既に早くから「魏を廢する者は蓋である」との讖言が風行しており、また十余万の衆が旗を揺るがして関の声をあげており、その声の勢いは大きなものである。もし、蓋呉が関中にしっかりと停まれば、蓋呉が南朝宋の文帝の求援の表中の説くところのものとなり、北魏に対して大いに「その巢窟を覆し」、関中の全てに靈鳥の鳴き声が響き渡るようにして、余を荒らしめ来たり蘇（よみがえ）るの徳を懐かしむ」状況となった。まるで北魏政権の生死存亡は完全にこの関中の一つの役（蓋呉の反乱）に係わっている。そのように、大いに蓋呉と通謀した嫌疑ある長安の寺僧、及び、その全国の沙門を同類としたのも災禍であつて逃れられないものであつた。……このように、蓋呉の起兵と北魏政権の生死存亡との関係は深いものがあり、その故に全国の沙門を同類としたとある。しかし、蓋呉と関係した寺院、僧侶は廢絶して然るべきであると考え、関係のない全国の沙門を同類として廢絶したのには理解のできない事である。何故ならば、太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であり、全国の沙門を同類とした完膚無き迄の廢仏を太武帝はしてはいけなかつたからである。春本説では、先に（一）向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」（《北京师范大学学报（社会科学版）》一九九四年第二期）で述べた如く考える。……（一）蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政権を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。」

### ③ 孙晓莹「浅析北魏太武帝灭佛原因」（《当代宗教研究》二〇〇〇年第三期）

この論文に次の如くある。「北魏太武帝灭佛是“三武一宗”毁佛之始、这一事件的原因是复杂的、本文试图从政治、经济、思想等方面对太武帝灭佛原因作一简要分析。」とあり、（一）政治方面。拥有雄厚经济实力的寺院形成了一股相当的政治力量、有时可以左右和危及国家政权、这是太武帝灭佛的主要原因。（二）经济方面。拥有雄厚经济实力的寺院形成了一股相当的政治力量、有时可以左右和危及国家政权、这是太武帝灭佛的主要原因。（三）思想方面。儒家礼教对异端的排斥和道教为争夺宗教地位的斗争、是导致太武帝灭佛的助因。（四）民族方面。太武帝认为佛乃胡神、而毁灭佛教改

奉中华土生土长的道教就可以表示认同华夏、以谋求和汉族士大夫的合作、从而有利于统治。」として廢仏について述べている。(一)の経済的な理由が主要原因だとしている。それに加えて(二)の政治の方面からの原因が重要な原因としている。更に、(三)思想方面(崔浩の儒教と仏教との関係並びに仏道二教の対立)・(四)民族方面(中華思想と統治の関係)から廢仏について捉えている。北魏の廢仏の原因は複雑であり、いくつかの要素が考えられるが、その主要な原因は、北魏社会に於いて仏教が隆盛になる事に依る寺院・僧侶の経済的な圧迫であるとしている。しかし、このような(一)・(二)・(三)・(四)の理由があったとしても、春本説では、北魏太武帝は仏教を内包した寇謙之の新天師道を信仰した道教君主であったので完膚無き迄の廢仏を行つてはいけなかつたと考える。……(3)僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。〈

④張箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」《西南民族学院学报(哲学社会科学版)》二〇〇〇年第十二期。

汤用彤《汉魏两晋南北朝佛教史》·王仲荦《魏晋南北朝史》·郭朋《汉魏两晋南北朝佛教·卿希泰《中国道教史》·任继愈《中国佛教史》·白寿彝《中国通史》第五卷《三国两晋南北朝时期》·向燕南《北魏太武帝灭佛原因考辨》·栾贵川《北魏太武帝灭佛原因新论》の諸説を取り上げて紹介している。そして、北魏の廢仏を引き起こした直接の原因は罪証(犯罪の証拠)による事を論じている。この論文に次の如くある。「在长安一佛寺中发现搜出了大量兵器、酿酒具、财物、淫室。这是刺激太武帝、崔浩等决心完全消灭佛教的四大刺激物、也是使得灭佛理由充分的四大罪证。(长安の一寺院の中で大量兵器、酿酒具、财物、淫室を発見した。これは太武帝、崔浩等を刺激して仏教を完全消滅する事を決させた四大刺激物であり、また、廢仏に至るに十分な四つの大きな罪証(犯罪の証拠)である。)」と論じている。この長安の一寺院が蓋呉と通謀して大量兵器、酿酒具、财物、淫室の四大罪証により廢仏が行われたとするのは早計である。何故ならば、蓋呉と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきであるが、太武帝は仏教を内包した寇謙之の新天師道の道教君主であったのである。従つて、完膚無き迄の廢仏を太武帝はしてはいけなかつたのである。それにも拘わらずに完膚無き迄の廢仏が行われたのは、長安の一寺院が蓋呉と通謀して大量兵器、酿酒具、财物、淫室の四大罪証により廢仏が行われたからではない。つまり、春本説では、先に(1)向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」(《北京师范大学学报(社会科学版)》一九九四年第二期)で述べた如く考える。……(1)蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。〉

⑤李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」《通化师范学院学报》二〇〇一年第二十二卷第三期)

この論文に、「……太武帝继位伊始、便信奉佛法、礼敬沙门、只是后来在道士寇謙之 and 司徒崔浩的鼓动和劝说下、欲求“长生之术”、便由信佛转而信道、推崇儒教。……」とある。北魏太武帝は道士寇謙之や司徒崔浩の影響により仏教を信仰するのでは無く、道教を信仰し、儒教を尊崇するようになったとしている。このことから廢仏が行われるようになったとしている。つまり、廢仏の原因を儒・佛・道の三教の思想的な対立構造の中にその原因があるとしているのである。しかし、これは北魏太武帝が仏教を内包した寇謙之の新天師道を信仰した道教君主であつたことと完膚無き迄の廢仏が何故行われたかの関係についての論考に欠けていると言える。……(2)道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰

相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。

⑥劉淑芬「從民族史的角度看太武滅佛」(《中央研究院歷史語言研究所集刊》二〇〇一年三月)

この論文に次の如くある。「由於太武滅佛的引爆點是公元四四五年杏城盧水胡人蓋吳的反叛、不過、學者都沒有特別注意到在陝西起兵的蓋吳是盧水胡人、而盧水胡人是篤信佛教的、並且從這個角度來探討蓋吳反叛和滅佛的關連。從五世紀初以來、北魏和盧水胡政權的北涼有相當的互動關係、並且在公元四三九年攻下北涼的都城姑臧、把北涼王室和臣民三萬餘家遷到平城。不過、北涼國主的兩個弟弟卻遠走高昌、在那裡延續北涼的政權、而被遷到平城的王室成員也有人起來反叛。此外、從五世紀以來盧水胡人或是直接、或是間接控制著北魏和南朝通往西域的道路。以上各項因素的盤錯交錯、終於促成了太武帝的滅佛。(太武帝的滅佛の引き金は四四五年杏城盧水の胡人蓋吳の反乱によるものであるが、しかし、學者は陝西に起兵した蓋吳が盧水の胡人であり、盧水の胡人は仏教を篤く信仰しており、並びにこの角度から蓋吳の反乱と滅仏の關係を探究する事に特別な注意をしていない。五世紀の初め以來、北魏と盧水の胡政權の北涼とに相當な互動關係があり、並びに四三九年に北涼の都城である姑臧を攻め下した。北涼王室と臣民の三万余家は平城に遷り到った。しかし、北涼國主の二人の弟達は離ればなれになった、そのうちに北涼の政權を延續し、平城に遷り至った王室の人々にも反乱をなす者がいた。このほかに、五世紀以來の盧水の胡人が直接に間接に北魏と南朝との西域に通往する道路を控制した。以上の各項の因素の盤錯が交錯して、遂に太武帝の滅佛が促成された。)…蓋吳は盧水の胡人であり、盧水の胡人は仏教を篤く信仰している。この角度から蓋吳の反乱と滅仏の關係について述べてある。蓋吳の仏教信仰が篤い事と、太武帝の廢仏との關係は無いとは言えないが、しかし、太武帝は仏教を内包した寇謙之の新天師道の道教君主であったのである。従って、完膚無き迄の廢仏を太武帝はしてはいけなかったのである。蓋吳の反乱を惡として蓋吳を徹底的に叩く事は当然の事であると考えられるが、しかし、仏教を内包した寇謙之の新天師道の道教君主であった太武帝は完膚無き迄の廢仏をしてはいけなかったのである。従って、蓋吳の仏教信仰が篤い為に太武帝は完膚無き迄の廢仏をしたとは言えないのである。やはり、太武帝は『宋書』索虜伝の「先是虜中謠言、「滅虜者吳也。」索甚惡之。二十三年、北地瀘水蓋吳、年二十九、於杏城天台拳兵反虜、諸戎夷普並響應、有衆十余万。素聞吳反惡其名、累遣軍擊之輒敗。」の「謠言」を封じる為に廢仏が行われたのだと考えるべきである。つまり、武功第一の太武帝にとつては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者吳也(虜(魏)を滅ぼすものは吳なり)。」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。つまり、「讖言—凶讖—僧侶—仏教」の密接な連関のもとに、凶讖禁絶と連携して完膚無き迄の廢仏が行われたのである。このように考えるのが正鵠を得ていると考える。…(一)蓋吳の反乱等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であった為に廢仏が行われた。」

⑦李玉芳「北魏太武帝灭佛原因浅析」(《宜宾学院学报》二〇〇四年第四卷第一期)

この論文に次の如くある。「北魏太武帝拓跋焘灭佛是中国古代史上(三武一宗)灭佛的第一次。此次法难主要是由于佛教与儒、道二教之间的矛盾冲突、佛教自身的腐化堕落以及佛教与主权之间的矛盾冲突而引起的。(北魏太武帝、拓跋焘の廢仏は中国古代史上(三武一宗)の廢仏の第一回目に相当する。

この法難の主要は仏教と儒、道の二教間との矛盾の衝突、佛教自身の腐化墮落が佛教と主権の間の矛盾の衝突に及び、引き起こされたものである。……太武帝は道教君主であり、仏教君主では無かった。太武帝の側近の崔浩は儒者であり、仏教を善しとしない。従って、仏教廃棄の方向性になることは当然の理である。しかし、「佛教与儒、道二教之间的矛盾冲突」が廢仏の一つの理由にはなっても、それが全てではない。李玉芳の考察では寇謙之の新天師道が仏教を内包したものである事に論が及んでいない。……(2)道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行つた。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。<

⑧王勇「太武帝大規模“灭法”原因初探」(《燕北师范学院学报》二〇〇四年第四期)

章立ては次の如くである。(一)、太武帝抑佛兴道的立场深受崔浩的影响。(二)、崔浩之反佛同时也体现了胡汉冲突。(三)、寺院经济膨胀对北魏政权的影晌。以上である。論題の「太武帝大規模「灭佛」原因初探」の如く原因初探であつて、従来の説の域を出るものではない。……(2)道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行つた。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。(3)僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。<

⑨陈燕「北魏太武帝崇道抑佛的回顾与反思」(《云南民族大学学报(哲学社会科学版)》二〇〇五年第四期)

論題の「北魏太武帝崇道抑佛的回顾与反思」の如く回顾と反思(改めて考える)であつて、従来の説をまとめたもので、その域を出るものではない。……(2)道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行つた。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。(3)僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。<

⑩王勇「北魏前期佛教文化初探」(《晋中学院学报》二〇〇五年第一期)

この論文に次の如くある。「总之、北魏道武帝、明元帝、太武帝前期、佛道并重、佛道并用、佛教成为一种政治上的需要、随着北魏社会封建化进程加快、佛教势力也迅速发展。(纏めると、北魏道武帝、明元帝、太武帝前期は仏教と道教が重用され、仏教は政治上の需要をなし、北魏社会の封建化に加速させ得るものとなり、仏教勢力も迅速に発展した。)。……北魏道武帝、明元帝、太武帝前期(廢仏の行われる以前)の仏教勢力について述べてある。……(4)北魏の廢仏について述べていない。<

⑪肖黎「论北朝的两次灭佛斗争」(《河北学刊》一九九二年第一期)

この論文に次の如くある。「……在北魏太武帝统治下、有的地区也是(村坞相属、多有塔寺)、(象教弥增、沙门众多)。北魏太武帝灭佛的原因、主要是出于政治上的动机。……所以、那种简单地把这次灭佛斗争归结为佛道之争的见解、显然是肤浅的。(北魏太武帝の統治下にあつて、ある地域もまた「村に相属する、多くに塔寺があり」、「教えが広まり、沙門多し」。北魏太武帝の廢仏の原因は、主には政治上の動機によるものである。……従つて、簡単にこの廢仏闘争の帰結が佛道の争いとなる帰結の見解は、明らかに皮相的である。)。……このように、北魏太武帝の廢仏の原因は、



主に政治上の動機によるものであるとした。……(2) 道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもよる太武帝は廃仏を行った。

⑫施光明「北朝の寺院経済和反佛浪潮」(《浙江学刊》一九九三年第一期)

この論文に次の如くある。「拓跋焘灭佛、只是看到寺院经济的发展(致使王法废而不行)、对统治不利的一面。(拓跋焘の廢仏は、寺院經濟の發展が王法を廢して行わないようにさせ、統治に対して、不利な一面を持つ事による。)。……孝文帝太和元年(四七七年)、尚只是(四方諸寺六千四百七十八、僧尼七万七千二百五十八人)、到北魏末年(五三四年)、已是(僧尼大众二百万矣、其寺三万有余)(『魏書』積老志)。短短五十余年间、寺院增加五倍、僧尼增加二十五倍、佛教对国计民生的破坏、已是可想而知了。……(孝文帝太和元年(四七七年)に、四方の諸寺6,478、僧尼77,258で、北魏末年(五三四年)には寺三万有余、僧尼大衆二百万と高々五十余年间で寺院が五倍、僧尼が二十五倍に増加した。このように、仏教は国が民生を計るのに対して破壊するものであり、すでに想像し知ることができる。)。……このように寺院經濟が廢仏を招く一因とした。……(3) 僧尼の増加等による北魏社会經濟への圧迫により廢仏が行われた。」

⑬吴平「北朝的兴佛与灭佛」(《华夏文化》二〇〇〇年第三期)

この論文に次の如くある。「魏太武帝既然接受了道教、崇奉汉神、表示亲汉、于是下令限制佛教。(北魏太武帝は既に道教を接受して、漢神(天)を崇奉し、漢に親しむを表示し、ここに下令して佛教を制限した。)。……北魏の廢仏の原因を仏道二教の対立と捉えている。……(2) 道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもよる太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。」

⑭韩毅「对“三武废佛”与佛教寺院地主所有制经济发展道路问佳的几点思考」(《天水师院学报》二〇〇〇年第二期)

北魏の僧尼は二,000,000人、国家の人口は二三,000,000人、その百分比は8.69%(『文献通考・戸口考』)である。僧尼は免租賦の特徴がある。……そこで、経済的な理由により廢仏が行われた。……(3) 僧尼の増加等による北魏社会經濟への圧迫により廢仏が行われた。」

⑮张箭「三武一宗灭佛研究」(四川大学博士论文 二〇〇一年)

④张箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」(《西南民族学院学报(哲学社会科学版)》二〇〇〇年第十二期。)に続いて⑮张箭「三武一宗灭佛研究」(四川大学博士论文 二〇〇一年。)がある。

この論文の百六十頁に、参考文献として「春本秀雄：『北魏太武帝の廢佛についての一考察』、日本《大正大学綜合佛教研究所年報》、一九八八年总第十号。」との記載がある。张箭博士がどの程度この拙論を参考にしたのか、その様相について述べると次の如くである。

张箭博士のこの論文の十四頁に、「……。挟图讖以反魏的僧人有之。趁盖吴起义之机、与义军通谋反魏的僧人也很可能有之。塚本善隆便把信佛反魏的各色人概括为冠名曰“佛教匪”(『北魏の佛教匪』、『塚本善隆著作集』第二卷《北朝佛教史研究》、第181頁。)。……当然、有僧人、佛寺反魏、

也决不意味着全国（北魏）的僧人、寺院都反魏。（……凶讖を挾蔵し魏に反する僧侶がいた。蓋呉の起義の機会に乗じて、義軍と通謀して魏に反する僧侶もいる事を可能にした。塚本善隆先生は佛教を信じ北魏に反する各人々々をおおまかに「佛教匪」と名づけた。（《北魏の佛教匪》、《塚本善隆著作集》第二卷《北朝佛教史研究》、第181頁。）……当然、僧侶、寺院は魏に反するものであり、意味していない全国の僧侶、寺院も全て魏に反するとした。）とある。凶讖を挾蔵し魏に反する僧侶がいて、蓋呉の起義の機会に乗じて、義軍と通謀して魏に反する僧侶もいる事を可能にしたと言う。この張箭博士の論述は何を根拠としているのか、張箭博士は明確に述べてはいない。更に、この張箭博士の論述の直後に塚本善隆先生の論文「北魏の佛教匪」（《塚本善隆著作集》第二卷《北朝佛教史研究》、第181頁。）を取り上げて張箭博士は論述をしているが、この塚本善隆先生の論文のどこを見ても「凶讖を挾蔵し魏に反する僧侶がいて、蓋呉の起義の機会に乗じて、義軍と通謀して魏に反する僧侶もいる事を可能にしたと言う。」と言う内容の論述を捜し出す事はできない。続けて「……当然、有僧人、佛寺反魏、也决不意味着全国（北魏）的僧人、寺院都反魏。（……当然、僧侶、寺院は魏に反するものであり、意味していない全国の僧侶、寺院も全て魏に反するとした。）」と張箭博士は論述しているが、そのように張箭博士が論述したその根拠は何に依っているのか。張箭博士はこれを明確には述べてはいない。……鄙見によれば、この「凶讖」と「僧侶」との関係を初めて述べたのは、安居香山「漢魏六朝時代における凶讖と仏教——特に僧伝を中心として——」（二「凶讖禁絶の歴史」安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年（昭和五十一年））である。春本はこの安居香山先生の論文を踏まえて、張箭博士が参考文献とした「春本秀雄・《北魏太武帝の廢佛についての一考察》、日本《大正大学綜合佛敎研究所年報》、一九八八年总第十号」に於いて「謠言（蓋呉）」と「廢仏」について論じた。更に、後に、拙論「北魏太武帝の凶讖禁絶」（『仏教論叢』第三十五号 一九九一年（平成三年）九月十日）に於いて「謠言（蓋呉）」と「凶讖」との関係について述べ、更に拙論「北魏太武帝の廢仏と凶讖禁絶についての一試論」（『緯学研究論叢』安居香山博士追悼 一九九三年（平成五年）二月一日）に於いて「謠言（蓋呉）」、「凶讖」・「僧侶」・「廢仏」・「凶讖禁絶」の関係について述べた。張箭博士が何を根拠に「蓋呉」・「凶讖」・「僧侶」について論じたのかを現時点に於いてここに明確に知り得る事はできない。しかし、張箭博士は拙論の「春本秀雄・《北魏太武帝の廢佛についての一考察》、日本《大正大学綜合佛敎研究所年報》、一九八八年总第十号」をその参考文献に記載している事から、張箭博士は春本の論文を「是」として踏まえて上記の如く論述していると考ええる。

春本説に於いては張箭博士のこの論文の「……。挾凶讖以反魏的僧人有之。趁蓋呉起义之机、与义军通谋反魏的僧人也很可能有之。……当然、有僧人、佛寺反魏、也决不意味着全国（北魏）的僧人、寺院都反魏。（……凶讖を挾蔵し魏に反する僧侶がいた。蓋呉の起義の機会に乗じて、義軍と通謀して魏に反する僧侶もいる事を可能にした。……当然、僧侶、寺院は魏に反するものであり、意味していない全国の僧侶、寺院も全て魏に反するとした。）」の部分が春本説の主張する所と同様の内容である事に興味を覚えるものである。これが全て張箭博士のオリジナルな論述であるのならば春本説に於いてはより興味を覚える事になるのではあるが、張箭博士はその論文に於いて詳細な注記はせずに拙論を参考文献として記載している

のみである。従つて、論者は張箭博士が春本の論文を「是」として踏まえて上記の如く論述したものと考える。

因みに、呂宗力博士は〈呂宗力（訳 李雲・中村敏子）『西晋南北朝より隋に至る凶讖を禁絶する歴史の真相』（『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書院 一九九六年（平成八年））〉に於いては、注の<sup>(54)</sup>に「春本秀雄 北魏太武帝の廢仏と凶讖禁絶についての一試論」、中村璋八編『緯学研究論叢』（東京：平河出版社、一九九三）二九九至三二四頁。」と注記して、論述している。

張箭博士にはこの「三武一宗天佛研究」（四川大学博士論文 二〇〇一年）の論文を書く前に、「论导致北魏天佛的直接原因暨罪证」（『西南民族大学学报（哲学社会科学版）』二〇〇〇年第十二期。）の論文がある。これは今回の本論考当章に於いて<sup>(4)</sup>張箭「论导致北魏天佛的直接原因暨罪证」（『西南民族大学学报（哲学社会科学版）』二〇〇〇年第十二期。）として既にその主張、説を要約し、論者のコメントを述べた。張箭博士のこの論文の説と同様にこの「三武一宗天佛研究」（四川大学博士論文 二〇〇一年）の論文の十四頁に次の如くある。「在这种严重的形势下（应该说这种形势主要是盖吴起义造成的）、发现长安一大佛寺中藏有大量兵器，太武帝等自然怀疑沙门与盖吴通谋反魏。再加查出其他三类违禁品、罪证、于是下达了严厉残酷的灭佛令。（この種の嚴重な形勢のもとに（この種の形勢の主たるものは蓋吳の起義によるものであると言ふべきである）、長安の一つの大寺院の中に大量の兵器を蔵するのを發見した、太武帝らは自然に沙門と蓋吳が通謀して魏に反するを疑い、再び加えて、その他の三種類の禁令に違反する品、罪証を查出し、ここに、嚴勵なる残酷な廢仏令を下達した。）である。張箭博士がもともと考えていた北魏法難の原因はこれにあると考えられる。……〈1〉蓋吳の反亂等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。〈5〉春本説を「是」として踏まえて論じている。〉

⑯ 理浄「三武一宗 法难引起的反思」（『五台山研究』二〇〇四年第三期）

この論文の「二、〈三武一宗〉法难的原因」に、「……由此、本来对佛教教并未“深求”的太武帝、一经崔浩的劝说、便由“归宗佛教”而转信道了。……倾向于道教而排斥佛教。（此れにより、本来仏教教義に対して探究しない太武帝は崔浩の勧めによつて、仏教から道教への歸宗を轉じた。…道教に傾向して仏教を排斥した。）」とある。北魏の廢仏の原因を佛道二教の対立と捉えている。……〈2〉道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。〉

⑰ 袁文良「中国历史上的『三武灭佛』事件」（『文史天地』二〇〇七年第八期）

従来の説をまとめたもので、その域を出るものではない。……〈2〉道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。〉  
以上である。

## 四 結

中国に於ける北魏法難の研究については従来の拙論の立説形成に用いた資料、並びに、孟慶楠の紹介した資料によって略その全体像を知る事が出来る。つまり、

- ① 杜士銓主編『北魏史』（山西高校聯合出版社 一九九二年（平成四年）（楊国勇））
- ② 任継愈主編『定本 中国仏教史Ⅲ』（柏書房 一九九四年（平成六年））
- ③ 鄭利安編著『魏晋南北朝史研究論文書目引得』（台湾中華書局印行、中華民國七四年九月、一九八五年（昭和六十年））
- ④ 呂宗力（訳 李雲・中村敏子）『両晋南北朝より隋に至る凶讖を禁絶する歴史の真相』（『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書院 一九九六年（平成八年））
- ⑤ 向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」（《北京师范大学学报（社会科学版）》一九九四年第二期）
- 栾贵川「北魏太武帝灭佛原因新论」（《中国史研究》一九九七年第二期）
- 孙晓莹「浅析北魏太武帝灭佛原因」（《当代宗教研究》二〇〇〇年第三期）
- 张箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」（《西南民族学院学报（哲学社会科学版）》二〇〇〇年第十二期）
- ⑨ 李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」（《通化师范学院学报》二〇〇一年第二十二卷第三期）
- ⑩ 劉淑芬「從民族史的角度看太武滅佛」（《中央研究院歷史語言研究所集刊》二〇〇一年三月）
- ⑪ 李玉芳「北魏太武帝灭佛原因浅析」（《宜宾学院学报》二〇〇四年第四卷第一期）
- ⑫ 王勇「太武帝大规模“灭法”原因初探」（《燕北师范学院学报》二〇〇四年第四期）
- 陈燕「北魏太武帝崇道抑佛的回顧与反思」（《云南民族大学学报（哲学社会科学版）》二〇〇五年第四期）
- ⑭ 王勇「北魏前期佛教文化初探」（《晋中学院学报》二〇〇五年第二期）
- ⑮ 肖黎「论北朝的两次灭佛斗争」（《河北学刊》一九九二年第一期）
- ⑯ 施光明「北朝的寺院经济和反佛浪潮」（《浙江学刊》一九九三年第一期）
- ⑰ 吴平「北朝的兴佛与灭佛」（《华夏文化》二〇〇〇年第三期）
- 韩毅「对“三武废佛”与佛教寺院地主所有制经济发展道路向佳的几点思考」（《天水师院学报》二〇〇〇年第二期）
- 张箭「三武一宗灭佛研究」（四川大学博士论文 二〇〇一年）

⑳ 理浄「三武一宗 法難引起的反思」(《五台山研究》二〇〇四年第三期)

㉑ 袁文良「中国历史上的『三武灭佛』事件」《文史天地》二〇〇七年第八期。

㉒ 施光明「北魏盖吴起义及其性质初探」(《宁夏教育学院火川师专学报(社科版)》一九九二·三)

以上の諸研究論文等に於ける主張、引用文献等を限なく検討する事によつて、中国に於ける北魏法難の研究について知る事が出来る。<sup>6)</sup>

上記の中国に於ける北魏法難の研究に於いてはその原因を概ね大別して分類すると次の如くである。

- 〔1〕 蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政権を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。……(上記の論文の番号の)⑤・⑥・⑧・⑩・⑱(の論文)。
- 〔2〕 道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。……(上記の論文の番号の)①・②・⑨・⑪・⑫・⑬・⑮・⑰・⑲・⑳・㉑(の論文)。
- 〔3〕 僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。……(上記の論文の番号の)①・②・⑦・⑫・⑬・⑯・⑰・⑱(の論文)。
- 〔4〕 北魏の廢仏について述べていない。……(上記の論文の番号の)③・④・⑭・㉒
- 〔5〕 春本説を「是」として踏まえて論じている。……(上記の論文の番号の)⑱

この中国に於ける北魏法難の研究と新説である春本説との相違については先考の拙論「北魏法難の実態解明について」(『大正大学研究紀要』第九十四輯 二〇〇九年(平成二十一年)三月)が既にある。しかし、今回の新たな詳細な論考に於ける、中国の諸説と新説である春本説との比較検討をして、その説の妥当性について述べると次の如くである。

〔1〕中国に於ける北魏法難の研究論文の諸説に於いて、「一つの論文」を除いて、春本説と同様の説は存在しなかつた。「一つの論文」とは、「⑱ 张箭「三武一宗灭佛研究」(四川大学博士论文 二〇〇一年)」である。この論文には、その参考文献に「春本秀雄・『北魏太武帝の廢佛についての一考察』、日本《大正大学総合佛教研究所年報》、一九八八年总第十号…」と記載があり、春本説を「是」として踏まえて論述している(本論考「三孟慶楠の紹介した資料について」の「⑮ 张箭「三武一宗灭佛研究」(四川大学博士论文 二〇〇一年)」参照)。従つて、春本説を踏まえていない春本説と同様の説は中国に於ける北魏法難の研究論文の諸説に於いては存在しなかつた。

〔2〕北魏の太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であつたので、蓋呉の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廢絶すると言つ完膚無き迄の全国の廢仏を太武帝はしてはいけないと言つ事情があつた。つまり、北魏政権を転覆しかねない蓋呉の反乱等と関係のある仏教寺院等を廢絶する事は太武帝の立場からして当然の事であるが、蓋呉の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廢絶する、完膚無き迄の全国の廢仏を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道の道教君主であつた太武帝は行なつてはいけない事情があつたのである。しかし、中国の諸説は上記の如く、考察していない所に立説形成されており、そこに問題があると考ええる。

【3】春本説では次のように考える。……武功第一の太武帝にとつては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）。」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。つまり、「謠言―凶讖―僧侶―仏教」の密接な連関のもとに、凶讖禁絶と連携して完膚無き迄の廃仏をする必要性が太武帝にはあった。

【4】北魏の法難は廃仏という観点から論究すると、上記の中国の説の〔1〕・〔2〕・〔3〕は【2】の理由によりその説に矛盾が生じてしまい、肯定できない。しかし、春本説の如く、北魏の法難を凶讖禁絶の側面から論究すると、太武帝・崔浩・寇謙之の三者の考え方の延長線上に矛盾無く、何故完膚無き迄の全国の廃仏を太武帝が行わなければならなかったのかが明白になる。つまり、北魏の法難を凶讖禁絶の側面から論究すると、【2】の理由があったとしても【3】の理由により、太武帝は完膚無き迄の全国の廃仏を行わなければならなかったのである。

【5】北魏太武帝の廃仏と凶讖禁絶は同じ時期に行われ、その行われた理由は凶讖禁絶が「主」で廃仏は「従」の力関係の間柄に於いて行われたのである。以上である。

尚、日本に於ける北魏法難の研究の諸説について、大略、本論考の註(1)で述べたので参照されたし。

論者はこれまでに本論考「一 叙」にあるように、

① 「北魏の凶讖禁絶―特に太武帝時について―」（『大正大学研究紀要』第九十二輯二〇〇七年（平成十九年）三月）

② 「北魏法難の実態解明について」（『大正大学研究紀要』第九十四輯二〇〇九年（平成二十一年）三月）

を述べ、更に今回、本論考である、

③ 「中国に於ける北魏法難の研究について」（『大正大学研究紀要』第九十五輯二〇一〇年（平成二十二年）三月）

を述べた。一応これで論者の「北魏法難の研究について」は一区切りがついた。<sup>7)</sup>これ等の論考に於いては論者の思い込みや思量を超えた思わぬ盲点が無いとは言えない。より確かな論にすべく江湖の御批判御叱正を願ひ、ここに擱筆する。以上。

## 註

(1)新説である春本説については、「北魏の凶讖禁絶―特に太武帝時に

ついて―」（『大正大学研究紀要』第九二輯二〇〇七年（平成一九年）

三月）・「北魏法難の実態解明について」（『大正大学研究紀要』第九四

輯二〇〇九年（平成二一年）三月）の拙論を参照して頂きたい。因み

に新説である春本説について整理して述べると次の如くである。

《新説である春本説は（春本説を「是」として踏まえていない）中国に於ける諸説と全く異なり、更に、日本に於ける諸説とも全く異なる。

【春本説】……「蓋呉と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきではあるが、北魏太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新

天師道を尊信する道教君主であつたので、蓋呉と通謀していない寺院までをも含めて完膚無き迄の全国の廢仏をしてはいけなかつた。しかし、太武帝は完膚無き迄の全国の廢仏を行った。それはどうしてなのか。太武帝は『宋書』・索虜伝の「先是虜中謠言、「滅虜者呉也。」・蓋甚惡之。二十三年、北地瀘水蓋呉、年二十九、於杏城天台拳兵反虜、諸戎夷普並響應、有衆十余万。燾聞呉反、惡其名、累遣軍擊之、輒敗。」の「謠言」を封じる為に廢仏を行ったのである。つまり、武功第一の太武帝にとつては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかつたのである。即ち、「謠言—凶讖—僧侶—仏教」の密接な連関のもとに、凶讖禁絶と連携して完膚無き迄の廢仏を太武帝はしたのである。」

【中国に於ける諸説】……「中国に於ける北魏法難の研究に於いては大別して、（一）蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。」（二）道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもよる太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。」（三）僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。」の三者が廢仏の理由である。しかし、北魏の太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界觀を持つ新天師道の道教君主であつたので、中国の説の（一）・（二）・（三）の理由があつたとしても、完膚無き迄の廢仏を太武帝は行つてはいけなかつたのである。つまり、（一）蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。」のは、論者の新説に於いても蓋呉の反乱等と関係のあ

中国に於ける北魏法難の研究について

る仏教寺院等を廢絶する事は勿論、肯定はするのではある。しかし、蓋呉の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廢絶する、完膚無き迄の全国の廢仏を太武帝が行おうとした事は肯定のできない事である。何故ならば、太武帝は仏教を内包した世界觀を持つ寇謙之の新天師道を尊信する道教君主であつたので、部分的な廢仏は肯定できても完膚無き迄の全国の廢仏をしてはいけなかつたからである。更に、（二）道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。」のは、仏教を内包した世界觀を持つ寇謙之の新天師道の信仰者であつた太武帝は完膚無き迄の全国の廢仏を行つてはいけなない立場であり、佛道二教を対立構造に捉え、それを廢仏の理由とする事は太武帝の信仰する寇謙之の新天師道が如何なる道教であるのかを考慮しない所業である。又更に、（三）僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。」のは、この理由のみで完膚無き迄の全国の廢仏を太武帝が行おうとした事は仏教を内包した世界觀を持つ寇謙之の新天師道を尊信する道教君主であつた太武帝であつた事から、考える事のできない事である。以上のように中国の説の（一）・（二）・（三）の廢仏の理由には問題があり、肯定する事はできない。」

【日本に於ける諸説】……「日本に於いては、北魏太武帝の廢仏については塚本善隆先生の論文「北魏太武帝の廢仏毀釈」（支那仏教史学一一四、『塚本善隆著作集』第二卷第二章 一九三七年（昭和二年）に「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」旨述べられている。これが定説となつて、横超慧日「北魏仏教の基本的課題」（横超慧日編『北魏仏教の研究』平楽寺書店 一九七〇年（昭和四五年）・安

居香山「漢魏六朝時代における図讖と仏教——特に僧伝を中心として——」(安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会一九七六年(昭和五一年)・佐藤智水「北魏廢仏論序説」(『岡山大学法文学部学術紀要史学篇』三九 一九七九年(昭和五四年)・鎌田茂雄著『中国仏教史』第三卷(東京大学出版会 一九八四年(昭和五九年) 第四章 北魏の仏教 第二節 北魏の仏教)・松丸道雄他編『世界歴史体系 中国史 三国〜唐 2』(山川出版社 一九九六年(平成八年) 第三章 南北朝 2 北朝の政治(窪添慶文)・野上俊静・小川貫弍・牧田諦亮・野村耀昌・佐藤達玄著『仏教史概説 中国篇』(平楽寺書店 一九六六年(昭和四三年) 第四章南北朝の仏教—教団の発展と儒道二教—9 北魏太武帝の廢仏)・平川彰著『インド 中国 日本 仏教通史』(春秋社 一九七七年(昭和五二年) 五月 第三章中国仏教 二 羅什及び南北朝の仏教 国家と仏教)・藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間に於て』(白帝社二〇〇四年一〇月 一曰白帝社アジア史選書〇〇五)等の諸研究本・諸論文に述べられているのが現状である。因みに、中国に於ける諸説に於いては「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」とした研究はない。「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」としているのは日本独特の主張なのである。日本に於いてこの説以外に、久保田量遠著『支那儒道仏三教史論』(東方書院 一九三一年(昭和六年)があるが、塚本善隆「北魏太武帝の廢仏毀釈」(『支那仏教史学』一—四 一九三七年(昭和十二年))によって否定されている。これについては拙論に於いても「北魏の凶讖禁絶—特に太武帝時について—」(『大正大学研究紀要』第九二輯二〇〇七年(平成一九年)三月)に於いても詳細に述べたの

でこれを参照されたし。更に、佐藤智水「北魏廢仏論序説」(『岡山大学法文学部学術紀要史学篇』三九 一九七九年(昭和五四年))の中で「魏を滅ぼすものは呉である」の謠言がある事を指摘してはいる。しかし、佐藤智水先生は塚本善隆先生の「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」の説を肯定しており、その謠言は長安の一寺院と蓋呉との結びつきを関連づけたものとして捉えており、その謠言が廢仏の主原因であるとはしていない。このように日本に於いては塚本善隆先生の「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」の説が定説となつている。しかし、この塚本善隆先生の「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」と言う説には問題がある。何故ならば、仏教を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道を尊信する北魏太武帝にいくら廢仏を崔浩が進言してみても聞き入られるはずはないのであり、廢仏を崔浩が進言すれば進言する程、崔浩を失脚させようとする方向に太武帝の気持は傾くのである。従つて、塚本善隆先生の「廢仏の中心人物は崔浩である」と言う説を肯定する事はできない。」

以上、【春本説】・【中国に於ける諸説】・【日本に於ける諸説】について述べた。

詰まる所、「中国の研究」に於いては、**北魏太武帝が寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主**であったので完膚無き迄の廢仏を太武帝は行えなかつた点についての考慮の欠如した所の立説形成にその研究の問題がある。そして、「日本の研究」に於いては、塚本善隆先生の「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」旨の説は、上記の如く**北魏太武帝が寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主**であったので、側近の崔浩が廢仏を進言すれば



進言する程に崔浩を失脚させようとする方向に太武帝の気持ち傾く事への考えの欠如した点にその研究の問題がある。そして、「春本の研究」では、上記の如く北魏太武帝が寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であったので廃仏を行う事は太武帝にとつては本意ではないが、武功第一の太武帝にとつては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。つまり、「謠言—凶讖—僧侶—仏教」の密接な関係のもとに、仏教を凶讖禁絶と連携して完膚無き迄の廃仏を太武帝はしなければならなかったのである。従つて、凶讖禁絶と廃仏が同時に行われ、凶讖禁絶が「主」で廃仏が「従」の関係により北魏太武帝の廃仏が行われたのであるとした。以上である。

- (2) 前回の論考に於いては⑤李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」(《通化师范学院学报》二〇〇一年第二十二卷第三期)・●施光明「北魏盖吴起义及其性质初探」(《宁夏教育学院火川师专学报(社科版)》一九九一・三)が未入手であったが、今回はこれ等を加えて、一つの論文を詳細に考察した。
- (3) 「北魏の凶讖禁絶——特に太武帝時について——」(『大正大学研究紀要』第九二輯平成一九年三月)の註(2)参照。
- (4) 平成二〇年四月二五日(金)六時限目の論者担当の「東洋文献講読B-1」の講義の時に北京大学からの留学生の孟慶楠(大正大学文学部歴史文化学科 短期(平成一九年四月から平成二〇年八月)留学生(0709011……:北京大学哲学研究科中国哲学修士課程二年))に下記の如くの論文要旨を手渡した。〈『大正大学研究紀要』第九四輯

中国に於ける北魏法難の研究について

原稿応募 論文要旨(文学部歴史文化学科 春本秀雄)(H. 20. 5. 9.) 論題 北魏法難の実態解明について 論文要旨……先の拙論に「北魏の凶讖禁絶——特に太武帝時について——」(『大正大学研究紀要』第九二輯 二〇〇七年(平成一九年)三月)がある。塚本善隆先生の論文「北魏太武帝の廃仏毀釈」(『支那仏教史学』一—四 一九三七年(昭和二年))を「是」とした日本における従来の論考、並びに、杜士銓主編『北魏史』(山西高校聯合出版社 一九九二年(平成四年)(楊国勇)、任継愈主編『定本 中国仏教史Ⅲ』(柏書房 一九九四年(平成六年))、鄭利安編著『魏晋南北朝史研究論文書目引得』(台湾中華書局印行、中華民國七四年九月、一九八五年(昭和六〇年))等の中国における従来の論考に対して新説を提示した。今回は「北魏法難の実態解明について」と題して北魏法難が如何様であったのかその実態について、従来の説と新説を提示してその相違を明確にして、新説の妥当性を述べてみたい。つまり、北魏の法難は三回あったと考えられる。(一)太延四年(四三三)……太武帝が五十歳以下の沙門の還俗を命じた。(『魏書』卷四上、世祖紀第四上・『資治通鑑』卷百二十三、宋紀五、文帝元嘉一五年)、(二)太平真君五年(四四四)……太武帝が沙門・師巫(巫覡)の妖怪の言を禁じ、更に沙門・師巫(巫覡)の私養を禁じた。(『魏書』卷四下、世祖紀第四下・『資治通鑑』卷百二十四、宋紀六、文帝元嘉二二年)、(三)太平真君七年(四四六)……太武帝が堂塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡經をみな撃破焚燒すべきこと、及び沙門は少長となく悉く生き埋めにすべきことを命じた。(『魏書』卷百十四、釈老志、太平真君七年三月・『高僧伝』卷十曇始伝(大正五十三・三九二中))である。以上の三回の北魏の法難におけ

るそれぞれについて、従来の説と新説についての見解を比較検討して、更に総じて北魏の法難の実態とは如何様であったのかについての考察を試みてみたい。以上を文面を孟慶楠に手渡した。そして、これから北魏の廢仏について論文を書くので北魏の廢仏についての論文があれば紹介して欲しい旨、論者は論者の講義の受講生である留学生の孟慶楠に依頼した。すると、孟慶楠は平成二十年五月九日(金)に北京大学図書館で論文検索をしたペーパーを持って来た。それは次の如くの内容のペーパーである。

相关材料

(一) 限定 “标佳 (title)”、或 “关键词 (keyword)”：“北魏”、或 “太武帝”、与 “滅佛”、或 “廢佛”、或 “法難”、或 “滅法”

① 向燕南：“北魏太武帝灭佛原因考辨”，《北京师范大学学报(社会科学版)》1984年第2期。

② 梁贵川：“北魏太武帝灭佛原因新论”，《中国史研究》1997年第2期。

③ 孙晓莹：“浅析北魏太武帝灭佛原因”，《当代宗教研究》2000年第3期。

④ 张箭：“论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证”，《西南民族学院学报(哲学社会科学)》2000年第12期。

⑤ 李春祥：“北魏太武帝与周武帝灭佛之异同”，《通化师范学院学报》2001年第22卷第3期。

⑥ 刘淑芬：“从民族史的角度看太武灭佛”，《中央研究院历史语言研究所集刊》2001年3月。

⑦ 李玉芳：“北魏太武帝灭佛原因浅析”，《宜宾学院学报》2004年第4卷第1期。

⑧ 王勇：“太武帝大规模“灭法”原因初探”，《燕北师范学院学报》2004年第4期。

⑨ 陈燕：“北魏太武帝崇道抑佛的回顾与反思”，《云南民族大学学报(哲学社会科学版)》2005年第4期。

⑩ 王勇：“北魏前期佛教文化初探”，《晋中学院学报》2005年第2期。  
(二) 限定 “标佳 (title)”、或 “关键词 (keyword)”：“北朝”、与 “滅佛”、或 “廢佛”、或 “法難”、或 “滅法”

⑪ 肖黎：“论北朝的两次灭佛斗争”，《河北学刊》1982年第1期。

⑫ 施光明：“北朝的寺院经济和反佛浪潮”，《浙江学刊》1983年第1期。

⑬ 吴平：“北朝的兴佛与灭佛”，《华夏文化》2000年第3期。  
(三) 限定 “标佳 (title)”、或 “关键词 (keyword)”：“滅佛”、或 “廢佛”、或 “法難”、或 “滅法”

⑭ 韩毅：“对“三武废佛”与佛教寺院地主所有制经济发展道路问佳的几点思考”，《天水师院学报》2000年第2期。

⑮ 张箭：“三武一宗灭佛研究”，四川大学博士论文 2001年。

⑯ 理净：“三武一宗 法难引起的反思”，《五台山研究》2004年第3期。

⑰ 袁文良：“中国历史上的“三武灭佛”事件”，《文史天地》2007年第8期。

以上である。  
因みに、その後、更に孟慶楠に「崔浩」と「寇謙之」のキーワード検索をして貰った。孟慶楠は五月二二日(木)にメールでその検索結果を送ってきた。次の如くである。

限定 “标佳 (title)”、或 “关键词 (keyword)”：“崔浩”、或 “寇謙之”、  
专著……

⑱ 陈寅恪：《崔浩与寇谦之》，上海：上海古籍出版社，1980年。论文…

⑲ 刘惠琴：「引儒入道—寇谦之对北方天师道的改造」，《敦煌学季刊》，2000年第1期。

⑳ 高照明：「从国史之狱看北魏时期民族融合中的文化冲突」，《扬州大学学报（人文社会科学版）》，2001年第3期。

㉑ 张德寿：「拓跋鲜卑统治者的心态与崔浩国史之狱」，《云南师范大学学报（哲学社会科学版）》，2002年第2期。

㉒ 刘昭瑞：「说天官与寇谦之的静轮天官」，《世界宗教研究》，2004年第3期。

㉓ 张泽洪：「北魏道士寇谦之的新道教论析」，《四川大学学报（哲学社会科学版）》，2005年第3期。

㉔ 谢路军：「寇谦之援儒入道思想述评」，《中央民族大学学报（哲学社会科学版）》，2005年第2期。

㉕ 宋冰：「北魏文化发展史上的崔浩时代」，《贵州大学学报（社会科学版）》，2005年第5期。

㉖ 曹小文：「崔浩国史案原因探析」，《廊坊师范学院学报》，2006年第4期。

㉗ 黄忠鑫：「简论崔浩的治国思想」，《十堰职业技术学院学报》，2006年第3期。

㉘ 张碧波：「北魏王国国史案的背后—一场特殊形态的华夷文化冲突」，《黑龙江民族丛刊》，2007年第5期。

以上である。

孟慶楠が提示した北京大学図書館検索のこれらの論文は〈专著…⑱

中国に於ける北魏法難の研究について

陈寅恪《崔浩与寇谦之》 上海 上海古籍出版社一九八〇年。を除外して論者にとっては未見の論考であった。早速、論者の勤務先の大正大学の図書館にて入手すべく手続きをしたのであるが、日本の大学の図書館と中国の大学の図書館との交流があまり円滑に行われていないとの事で、大正大学図書館から上記の論文の入手はほぼ不可能であるとの事であった。そこで孟慶楠に相談したところ、何とか孟慶楠自身が入手して論者に手渡すとの事であった。後日、以下の六つの論文以外を論者は孟慶楠より入手した。

③ 孙晓莹：「浅析北魏太武帝灭佛原因」，《当代宗教研究》2000年第3期。

⑤ 李春祥：「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」，《通化师范学院学报》2001年第22卷第3期。

⑥ 刘淑芬：「从民族史的角度看太武灭佛」，《中央研究院历史语言研究所集刊》2001年3月。

⑬ 张箭：「三武一宗灭佛研究」，《四川大学博士论文》2001年。

⑰ 袁文良：「中国历史上的『三武灭佛』事件」，《文史天地》2007年第8期。

㉓ 张泽洪：「北魏道士寇谦之的新道教论析」，《四川大学学报（哲学社会科学版）》，2005年第3期。

この六つの論文のうち、次の二つの論文は大正大学図書館を通して京都大学文学研究科図書館閲覧係（TEL 075-753-2176）より平成二〇年六月に入手した。

⑥ 刘淑芬：「从民族史的角度看太武灭佛」，《中央研究院历史语言研究所集刊》2001年3月。

② 張澤洪：「北魏道士寇謙之的新道教論析」，《四川大學學報（哲學社會科學版）》，2005年第3期。

従つて、あと次の四つの論文が入手できていない事になる。

③ 孫曉堂：「淺析北魏太武帝滅佛原因」，《當代宗教研究》2000年第3期。

⑤ 李春祥：「北魏太武帝與周武帝滅佛之異同」，《通化師範學院學報》2001年第22卷第3期。

⑬ 張箭：「三武一宗滅佛研究」，四川大學博士論文，2001年。

⑰ 袁文良：「中國歷史上的『三武滅佛』事件」，《文史天地》2007年第8期。

更に孟慶楠の提示した上記の二八の論文以外に、

● 施光明「北魏蓋吳起义及其性質初探」(《寧夏教育學院火川師專學報(社科版)》，一九九一・三)

を捜して欲しい旨、平成二〇年六月に依頼した。これは、⑥ 劉淑

芬「从民族史的角度看太武滅佛」《中央研究院歷史語言研究所集刊》二〇〇一年三月。の論文の18頁の注61に、〈施光明、〈北魏蓋吳起義

及其性質初探〉《寧夏教育學院火川師專學報(社科版)》一九九一・三。認為這識言是蓋吳所散佈的。〉とある。この論文は論者の新説の論旨

の展開に於いて見るべき必要文獻であり、何とか入手したいと考えている。その後、平成二〇年九月一日付けのメールで北京の孟慶楠から、

② 張澤洪：「北魏道士寇謙之的新道教論析」，《四川大學學報（哲學社會科學版）》，2005年第3期。（この論文は先に述べたように、大

正大學図書館を通して京都大學文學研究科図書館閲覧係（TEL 075・753・2176）より平成二〇年六月に入手済みではあった。）

⑬ 張箭：「三武一宗滅佛研究」，四川大學博士論文，2001年。

⑰ 袁文良：「中國歷史上的『三武滅佛』事件」，《文史天地》2007年第8期。

の論文が送られてきた。従つて、あと、

③ 孫曉堂：「淺析北魏太武帝滅佛原因」，《當代宗教研究》2000年第3期。

⑤ 李春祥：「北魏太武帝與周武帝滅佛之異同」，《通化師範學院學報》2001年第22卷第3期。

● 施光明「北魏蓋吳起义及其性質初探」(《寧夏教育學院火川師專學報(社科版)》，一九九一・三)

の三つの論文が平成二〇年九月一七日の時点で入手できていない状況であった。北京の孟慶楠へ平成二〇年九月一七日付けのメールで上記

の三つの論文を入手すべく再び依頼をしたのであるが、その後の連絡は一年後の平成二一年九月一七日に於いても未だ無い。

しかし、孟慶楠は上記に如く論者に多くの貴重な資料を提供した。この紙面を借りてここに再度「非常感謝！」。

論者は大正大學図書館へ残りの上記の三つの論文を入手すべく依頼した。大正大學図書館は燎原書店（東京都千代田区神田保町一の十二

電話03・3294・3445）へ依頼して「③ 孫曉堂「淺析北魏太武帝滅佛原因」《當代宗教研究》二〇〇〇年第三期。」を平成二〇年

一月六日に論者は入手する事ができた。更に、論者が亜東書店（東京都千代田区神田錦町一の一四 電話03・3835・7091）へ依

頼して、

③ 孫曉堂：「淺析北魏太武帝滅佛原因」，《當代宗教研究》2000年第

3期。

⑤ 李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」，《通化师范学院学报》2001年第22卷第3期。

● 施光明「北魏盖吴起义及其性质初探」，《宁夏教育学院火川师专学报》（社会科学版），一九九一・三。

以上の三つの論文を平成二〇年二月一六日に入手する事ができた。これで全ての論文を入手することができた。

(5) このように孟慶楠が論者に紹介した論文について、先の拙論「北魏法難の実態解明について」、『大正大学研究紀要』第九四輯二〇〇九年（平成二一年）三月）「四 春本説と中国の説」の「(二) 中国の説」に於

いて、本論考の如くの詳細な考察を經ていない為に、本論考とは少し異なるが、既に分類をしたものがある。参照されたし。

(6) 現在のところはここまでであるが、この先に於いて別の資料が存在する可能性は否定できない。本小論はこの意味に於いて通過点の小論である事をここに記しておく。

(7) 論者のこれまでの「北魏法難の研究について」は、「北魏の凶讖禁絶——特に太武帝時について——」、『大正大学研究紀要』第九二輯平成一九年三月）の註(2)を参照されたし。更に、本文で掲げた三つの論考とを併せて一書にして世に問いたいと考えている。江湖の御批判御叱正を切に願うものである。